

アジア舞台芸術祭
参加者インタビュー#03

佐々木透さん／演出家

劇作家・演出家として「リクウズルーム」を主宰する佐々木さん。参加チームの中で唯一、会期開始前に1時間半程度の新作戯曲を書き下ろし、一部を抜粋した短編作品として上演しました。

「(会期初日に)メンバーを見てから書き始めるのでは、時間のロスが大きい。書き手として一番攻めているものを発表したいという思いがありました。10～15分の短い作品を書いて足りないものを膨らませるより、たくさんある中からチョイスする難しさの方が結果的にいいものになると思いました。

言葉の壁はもちろん、文化的なことや環境の違いは当然出てくる。それを理解し合おうとするより、ただひたすら“いい作品をつくろう”という気概で臨みました。国際交流なんて肩肘張らなくても、舞台が好きだという根っこでつながれば、考え方の相違があったとしても受け止められる、と考えていました。

僕のチームには台北の世紀當代舞團からリ・フェイウエンさんが参加したのですが、“踊っている時に髪の毛を結んでもいいか”と言われて、取った方がいいと答えたら、彼女に“どこの国でも男性は、女性が髪をほどく姿が好き。あなたも男ですね”と言われたり。笑いの絶えない稽古場でした」

一方で劇場でのリハーサル前後など、海外から訪れた演劇人たちと積極的にコミュニケーションを取っていた佐々木さん。

きっかけとなったのは、直前のセミナーで韓国から参加したキム・シンキさんが投げかけた、「作品をつくるだけでいいのか」という言葉でした。

「その言葉をきっかけに、翌日からは他チームとなるべく話をするようにしました。みんなと話してみて、文化的な違いはあるにせよ、やはり作り手の考えていることは一緒だなと。そこに距離は感じませんでした。」

作家としてあくまで自分の演劇づくりにこだわりながら、海外チームの参加者たちとも交流を深めた佐々木さん。芸術祭の10日間は「誰よりも一番おいしく、贅沢に過ごしたんじゃないか、という自信がある」と言う通り、とても充実した時間になったようです。

「アーティストとしても、本当に恵まれた環境でやらせて頂いて、有り難いと思いました。ラウンドテーブルの『芸術性と大衆性』というテーマでも話しましたが、

インディペンデントで上演する（公演を打つ）ということに疲弊していた部分もあったので、こういう創作環境は新鮮でした。

他のチームの作品も、全部面白くて。これまで十年くらい続いているアジア舞台芸術祭の中で一番いい回だったはずだ、と確信しました。そのくらい充実していたと思います。3時間という長い上演会でしたが、客席を見渡しても観客の集中力の高さを感じました。

入場料が無料というのもいいですよ。贅沢です。日本では、劇場に来ること自体のハードルがまだまだ高い。そういう意味でも、アジア舞台芸術祭がいいきっかけになれるのではないのでしょうか」